

第49回名古屋春栄会  
演目のあらまし

平成27年1月11日

名古屋春栄会事務局

## 目 次

翁（おきな）	1
羽衣（はごろも）	3
高砂（たかさご）	4
角田川（すみだがわ）	5
猩々（しょうじょう）	6
竹生島（ちくぶしま）	7
車僧（くるまそう）	8
田村（たむら）	9
竜田（たつた）	10
難波（なにわ）	11
楊貴妃（ようきひ）	12
枕慈童（まくらじどう）	13
室君（むろぎみ）	14
小袖曾我（こそでそが）	15
〔能のミ二知識〕	16

このリーフレットは、第49回名古屋春栄会の演目を解説したものです。  
演目の記載順は、番組の順です。  
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

## 翁（おきな）

---

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穡を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」とい2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおはしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈禱なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

## 羽衣（はごろも）

---

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） \*序ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の独調〔クセ〕の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようと持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は仕方なく承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の独調〔クセ〕の部分の抜粋）

春霞。たなびきにけり久かたの。月の桂も花や咲く。げに花かずら。色めくは春の  
しるしかや。面白や天ならで。ここも妙なり天つ風。雲の通路吹きとじよ。乙女の  
姿。しばし留りて。この松原の。春の色を三保が崎。月清見瀉富士の雪。いづれや  
春のあけぼの。たぐい波も松風も。のどかなる浦の有様。その上天地は。何を隔て  
ん玉垣の。内外の神の御末にて。月も曇らぬ日の本や。君が代は。天の羽衣まれに  
来て。なずともつきぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。声そえて数々の。笙笛琴篳篥。  
孤雲のほかにみちみちて。落日の紅は。蘇命路の山をうつして。緑は波に浮島が。  
拂う嵐に花ふりて。げに雪をめぐらす。白雲の袖ぞ。妙なる。

## 高砂（たかさご）

---

【分 類】初番目物（脇能＝男神物） \*神舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。寿福をいただき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声を楽しむさっさっの声を楽しむ。

## 角田川（すみだがわ）

---

【分 類】四番目物（雑能＝狂女物） ＊カケリ

【作 者】観世十郎元雅

【主人公】シテ：狂女＝梅若丸の母（面：曲見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

春の武蔵野、隅田川のほとりで大念仏を催すことになり、渡守がその参加者を募っています。そこへ一人の女物狂が物につかれたようにやって来ます。女は京の都の北白川の者で、子どもを人買いにさらわれ、そのため狂気になって我が子の行方を尋ね歩き、はるばる東国まで来たのです。そして渡舟に乗ろうとしますが、渡守はなかなか乗せようとしません。すると女は、かもめを見つけ、「名にしおば いざ言問はむ 都鳥 わが思ふ人は ありやなしやと」という在原業平の和歌を思い出し、業平は妻を、自分は我が子を捜しているが、その思いは同じだと嘆きます。渡守は哀れになり、舟に乗せてやり、舟を漕ぎながら川向こうの大念仏は、一年前、人商人に連れられた子どもが病死したのを人々が不憫に思い回向しているのだと語ります。その子こそ、尋ねる我が子梅若丸と知り、女は泣き伏します。同情した渡守は、女をその塚に案内します。母の念仏に、我が子の声が聞こえ、その姿が幻のように現れますが、その幻は夜明けと共に消え失せ、後には草の生い茂った塚があるのみでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

われもまた。いざこと問わん都鳥。いざこと問わん都鳥。わが思い子は東路に。ありやなしやと。問えども問えども答えぬはうたて都鳥。鄙の鳥とやいいてまし。げにや舟競う。堀江の川の水際に。来居つつ鳴くは都鳥。それは難波江これはまた。隅田川の東まで。思えば限りなく。遠くも来ぬるものかな。さりとては渡守。舟こぞりて狭くとも。乗せさせたまえ渡守。さりとては乗せて。たまえや。

## 猩々（しょうじょう）

---

【分類】五番目物（祝言物） ＊中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸边の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変らぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。



## 竹生島（ちくぶしま）

---

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物） ＊舞働

【作者】 金春禅竹

【主人公】 前シテ：漁翁（面・三光尉）、後シテ：龍神（面・黒髭）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

延喜帝（醍醐天皇）に仕える朝臣が、竹生島明神に参詣を志し、琵琶湖畔までやって来ます。丁度、老人が若い女をともなって釣舟を出しているのので、それに、声をかけて便船をたのみます。老人は快く彼を舟に乗せ、のどかな浦々の春景色を楽しみながら、竹生島に向かいます。竹生島に到着すると、老人は朝臣を神前に案内します。朝臣は、つれの女も一緒に来るので、この島は女人禁制と聞いているかと、不審がると、老人と女は、弁才天は女性の神であるから、女人を分け隔てはしないと、こもごもこの島の明神の由来を語ります。やがて二人の者は、実は人間ではないと、若い女は社殿の扉の内に入り、老人は波間にその姿を消します。

<中入>

そのあと、弁才天の社人が出て、朝臣に宝物を見せます。そうしているうちに、社殿が鳴動し、光輝き、音楽も聞えたと思うと弁才天が出現し、舞を舞います。続いて湖上が波立つと見るや、龍神が水中より現れて、朝臣に金銀珠玉の玉を捧げ、激しい舞を見せます。そして、弁才天と龍神とは仏が衆生を救うための二つの形であるといい、国土鎮護を約束し、弁才天は再び社殿に入り、龍神は湖水へと飛んで入ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

もとより衆生済度の誓。もとより衆生済度の誓。さまざまなれば。あるいは天女の形を現じ。有縁の衆生の願をかなえ。または下界の竜神となつて。国土を守る。誓を現わし。天女は宮中に入らせ給えば。竜神は湖水の上にかけて。波を蹴たて。水を返して天地に群がる大蛇の形。天地に群がる大蛇のかたちは。竜宮に飛んでぞ。入りにける。

## 車僧（くるまそう）

---

【分 類】五番目物（切能）

【作 者】不明

【主人公】前シテ：山伏（直面）、後シテ：天狗太郎坊（面・大ベシミ）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

いつも牛のいない破れ車に乗って往来しているので「車僧」と呼ばれている奇僧がいました。ある雪の日、車僧はいつものとおり車に乗り、嵯峨野から西山の麓へやって来て、四方の雪景色を眺めて楽しんでます。するとそこへ、愛宕山の天狗が、山伏姿で現れ、この僧の奇行につけ込んで魔道に誘惑しようと、禅問答をしかけますが、軽くあしらわれてしまいます。そこで、自分は太郎坊だと名乗り、再度の挑戦を約して、雲に乗って飛び去ります。

<中入>

その後、溝越天狗と仇名される木葉天狗が出て来て、なんとか車僧を笑わせようと、さまざまなことをしますが、どうにもならず、これも逃げ去ってゆきます。やがて先の太郎坊が、今度は大天狗の姿で現れ、行くらべをいどみます。ところが、車僧の乗った牛もつけていない車は、太郎坊がいくら打っても動かなかったのに、車僧が払子を一振りするだけで、自在に雪の山路を疾駆します。太郎坊はその法力に驚き、どうおどかしても自若としている態度に恐れ入り、仏法を妨げるのをあきらめ、ついには敬意を表して合掌して消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

不思議やなこの車の。不思議やなこの車の。ゆるぎ巡りて今までは。足弱車と見えつるが。牛も無く人も引かぬに。易す易すと遣りかけて飛ぶ。車とぞなりたりける。小車の山の陰野の道すがら。法の道の辺遊行して。貴賤の利益なすとかや。所から。ここは浮世の嵯峨なれや。雪の古道跡深き。車のわだちは足引の。大雪にはよも行かじ。げに雪山の道なりと。法の車路平かに。行くか行かぬかこの原の。草の小車雨添えて。打てども行かず。止むれば進むこの車の。法の力とて。嵯峨小倉大井嵐の。山河を飛び翔って。けばくすれども騒がばこそ。まことに奇特の車僧かな。あらたつとや恐ろしやと。がしょうをやわらげ大天狗は。合掌してこそ。失せにけれ。

## 田村（たむら）

---

【分 類】二番目物（修羅物＝勝修羅） ＊カケリ

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：坂上田村麻呂の霊（面・平太）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

東国の僧が、都見物に来て、3月半ばに清水寺に着き、爛漫と咲くたそがれ時の桜花に見とれていると、箒を手にした一人の童子が現れ、その木陰を清めます。そこで、僧がこの寺の来歴を尋ねると、それに応じて、清水寺建立の縁起を詳しく語ります。また、あたりの名所を教え、ともに桜月夜の風情を楽しみます。その様子が常の人とはどうも違うのを訝った僧が、童子に名を尋ねると、我が名を知りたいのならば帰る方を見て下さいと、田村堂の内陣へと姿を消します。

<中入>

僧が夜通しで桜の木陰で経を読んでいると、威風堂々たる武将姿の坂上田村麻呂の霊が現れます。そして、勅命を受けて、鈴鹿山の賊を討伐すべく軍を進めたが、合戦の最中に千手観世音が出現し、その助勢によって、敵をことごとく滅ぼした様子を語り、これも観音の仏力であると述べます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

千方といっし逆臣に。仕えし鬼も。王地を侵す天罰にて。千方を捨つればたちまち亡び失せしぞかし。ましてや間近き。鈴鹿山。ふりさけ見れば伊勢の海。ふりさけ見れば伊勢の海。阿濃の松原むらだち来たつて。鬼神は。黒雲鉄火をふらしつつ。数千騎に身を変じて山の。如くに見えたる所に。あれを見よ。不思議やな。あれを見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に。千手観音の。光をはなつて虚空に飛行し。千の御手ごとに。大悲の弓には。知恵の矢をはげて。ひとたび放てば千の矢先。雨あられと降りかかって。鬼神の勢に。乱れ落つれば。ことごとく矢先にかかって鬼神は残らず討たれにけり。有難し有難しや直に咒咀諸毒薬念彼。観音の力を合わせて。すなはち還着於本人。すなはち還着於本人の。敵は亡びにけりこれ。観音の。仏力なり。

## 竜田（たつた）

---

【分 類】四番目物（夜神楽物＝略初番目物） ＊神楽

【作 者】金春禅竹

【主人公】前シテ：巫女（面・増女）、後シテ：竜田姫の神霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

日本六十余州の神社仏閣に納経を志す廻国の僧が、奈良の社寺を拝し終え、続いて河内国（大阪府）へと急いでいます。途中、竜田明神に参詣のため、竜田川を渡ろうとすると、一人の巫女が現れ、「竜田川 紅葉乱れて 流るめり 渡らば錦 中や絶えなん」という古歌をひいて止めます。僧が、それは秋のことで、今はもう薄氷が張っている頃なのにと言うと、巫女は更に「竜田川 紅葉を閉づる 薄氷 渡らばそれも 中や絶えなん」という歌もあると答え、別の道から社前に案内します。そして、霜枯れの季節にまだ紅葉しているのを不審に思う僧に、紅葉が神木であることを語ります。さらに竜田山の宮廻りをするうちに、巫女は、自分は竜田姫の神霊であると名乗って社殿の中へ姿を消してしまいます。

<中入>

その夜、僧が社前で通夜をしていると、竜田姫の神霊が現れて、明神の縁起を語り、あたりの風景を賞美したあと、神楽を奏して、虚空へと上っていきます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

ひさかたの。月も落ちくる。滝まつり。波の。竜田の。神のみ前に。神のみ前に。  
散るはもみじ葉。すなわち神の幣。竜田の山陰の。時雨降る音は。さっさっの鈴の  
声。立つや川波は。それぞ白木綿。神風松風吹き乱れ吹き乱れ。もみじ葉散り飛ぶ  
木綿附鳥の。み被も幣も。ひるがえる小忌衣。謹上再拝再拝再拝と。山河草木国土  
治まりて。神はあがらせ。たまいけり。

## 難波（なにわ）

---

【分 類】初番目物（脇能） \*楽

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：王仁（面・悪尉）

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

廷臣が従者と共に熊野から京の都に帰る途中、難波に立ち寄ります。すると杉箒を持った老翁が連れの男と共に現れ、天下泰平の春を詠いながら、梅の木陰を掃き清めます。廷臣が老人たちに梅の木のいわれを尋ねると、老翁は難波津の歌、仁徳帝の慈愛、難波の都の平和と繁栄について語り、自分は仁徳帝の即位を推進した百済国の王仁であると名乗り、舞楽を舞うことを約して立ち去ります。

<中入>

難波の春の夜に木華開耶姫と王仁が現れて名乗ります。そして木華開耶姫が梅の花を詠じて舞を舞います。続いて王仁が難波を祝福して舞楽を舞います。舞楽のうちの古の聖賢をたたえ、治世を祝福します。

【詞章】（今回の連吟の部分の抜粋）

あら面白の音楽や。あら面白の音楽や。時の調子にかたどりて。春鶯囀の楽をば。春風ともろともに。花を散らしてどうど打つ。秋風楽はいかにや。秋の風もろともに。波を響かしどうど打つ。万歳楽は。よろず打つ。青海波とは青海の。波立て打つは。採桑老。抜頭の曲は。返り打つ。入り日を招き返す手に。入り日を招き返す手に。今の太鼓は波なれば。寄りては打ち、返りては打つ。この音楽に引かれて。聖人御代にまた出で。天下を守り治むる。天下を守り治むる。万歳楽ぞめでたき。万歳楽ぞめでたき。

## 楊貴妃（ようきひ）

---

【分類】 三番目物（本鬘物） \*序ノ舞

【作者】 金春禪竹

【主人公】 シテ：楊貴妃の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

安祿山の乱の時（756年）、馬嵬が原〔ばかいがはら〕で殺された楊貴妃のことを忘れかねた唐の玄宗皇帝は、神仙の術を会得した方士に命じて、彼女の魂魄のありかを尋ねさせます。方士は天上から黄泉まで探しますが見当たらず、最後に常世の国の蓬莱宮へとやって来ます。そして所の者に尋ねると、太真殿という御殿に玉妃という人がいるというので、その建物を見つけ、様子をうかがいます。すると中から、昔を偲ぶ詠嘆の声がもれて来ます。そこで方士が、唐の天子の使者だと名乗ると、貴妃は驚いて帳を押し除け、簾をかかげて、姿を見せます。方士が使いの趣を述べると、貴妃は皇帝との昔を懐しみ、憂いに沈みます。方士は、貴妃の見つかった事を急ぎ帰って報告するので、会った証に形見の品を請います。貴妃は髪にさしていた玉の釵を渡しますが、方士は、このような珍しからぬ品よりも、帝とひそかに契られたお言葉があれば、それを聞かせてほしいといひます。貴妃は、七夕の夜、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝と、その愛の永遠を誓ったことを打ち明けます。そして、その誓いも空しく、私ばかりが遠くへ来てしまったが、できれば未来でお目にかかりたいと伝えてほしいといひます。さらに自分はもとは上界の仙女であった身の上について語り、舞を舞って見せ、形見の品を持って帰る法士を一人寂しく見送ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

われもそのかみは。上界の諸仙たるが。往昔の因ありて。かりに人界に生れきて。楊家の深窓にやしなわれ。いまだ知る人なかりしに。君きこしめされつつ。急ぎめしいだし。后宫に定めおき給い。借老同穴の語らいも。縁つきぬればいたずらに。またこの島にただひとり。帰りきたりてすむ水の。あわれはかなき身の露の。たまさかにあい見たり。しずかに語れ憂き昔。さるにても。思い出れば恨みある。その文月の七日の夜。君とかわせし睦言の。比翼連理の言の葉も。かれがれになる私語の。篋の一よの契りだに。なごりを思う習いなるに。

ましてや年月。なれてほどふる世の中に。さらぬ別れのなかりせば。千代も人にはそいてまし。よしそれとてものがれえぬ。会者定離ぞと聞く時は逢うこそ別れ。なりけれ。

## 枕慈童（まくらじどう）

---

【分類】初、四番目物（遊楽物） \*楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：慈童（面・童子）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

古代中国、魏の文帝の時代、酈縣山の麓から霊水が流れ出るというので、勅使が源を尋ねるべく、その山に派遣されます。勅使の一行は、菊の花の咲き乱れた山中の庵に、一人の不思議な少年を見つけます。勅使が「人間の住まないような山奥にいるお前は化生の者か」と尋ねると、少年は「あなたこそ化生の者でしょう。私は周の穆王に仕えていた侍童です」と答えます。勅使は「周というのはもう数代も前の世だ」と驚きます。話を聞くと、少年は、穆王に召し使われていたが、誤って王の枕をまたぎ、その罰でこの山に配流されます。しかし、少年に悪意のないことを知って憐れんだ王が、その枕に二句の偈（仏徳を讃えた詩）を書きそえて与えました。その文字を菊の葉の上に写して書くと、その葉の露が霊薬となり、それを飲んでいたため、少年は七百年後の今でも若いままで生きながらえていたのです。少年自身も、自分の長命に驚き、楽しく舞を舞ったあと、寿命を帝に捧げ、そのまま山中の仙家へと帰ってゆきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

すなわちこの文菊の葉に。ことごとく現わる。さればにや。雫もこうばしく滴も匂い。淵ともなるや谷陰の水の。所は酈縣の山のしたたり、菊水の流れ。泉はもとより酒なれば。汲みては勧め。すくいては施し。わが身も飲むなり飲むなりや。月は宵の間、その身も酔いに。引かれてよろよろよろよろと。ただよい寄りて。枕を取りあげ、いただき奉り。げにもありがたき君の聖徳と。岩根の菊を。手折り伏せ手折り伏せ。数妙の袖枕。花を筵に伏したりけり。もとより薬の酒なれば。もとより薬の酒なれば。酔いにも侵されず。その身も変わらぬ七百歳を。保ちぬるも。このおん枕のゆえなれば。いかにも久しく、千秋の帝。万歳のわが君と。祈る慈童が七百歳を。わが君に授けおき、所は酈縣の。山路の菊水。汲めや掬べや、飲むとも飲むとも。尽きせじや尽きせじと。きくかき分けて、山路の仙家に。そのまま慈童は、入りにけり。

## 室君（むろぎみ）

---

【分 類】四番目物（夜神楽物・略初番目物） ＊神楽、中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：韋提希夫人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）室明神の神職が神事を執り行おうと、室津の遊女たちを神前に集ま  
らせたところ、室君達は梅の香が匂う春の夜の興趣を歌いつつ、船に乗ってやって  
来ます。神職の命により、棹の歌を歌い、神楽を奏していると、室明神が女体の姿  
で現れます。そして、感涙に袖をぬらしていると、夜も明けはじめ、明神は空高く  
昇っていくのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

玉のかんざし羅綾のたもと。風にたなびき瑞雲に乗り。所は室の。海なれや。山は  
のぼりて上求菩提の機をすすめ。海はくんだりて下化衆生の相を現し五濁の水も。実  
相無漏の大海となつて。花降り異香薫じつつ。相好まことに肝に銘じ。感涙袖をう  
るほせば。はや明けゆくや春の夜の。はや明け方の雲にのりて。虚空にあがらせ。  
給いけり。



## 小袖曾我（こそでそが）

---

【分類】 四番目物（雑能） \*男舞

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：曾我十郎祐成（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

曾我十郎と五郎の兄弟は、源頼朝が富士の裾野で巻狩を行うので、この機会に親の敵工藤祐経を討とうと決心します。そうして、それとなく暇乞いをするため、また、五郎の勘当の許しも得ておこうと、母のもとを訪れます。まず、十郎が案内を求めると、母は喜んで迎え入れますが、五郎には出家になれという母の命にそむいたというので怒って会おうとしません。十郎はこのたび兄弟そろって御狩に出ようとしたのに、弟を許してくださらないのは、私の身をも思ってくださいらないことになるのです。また、五郎は箱根にいた間母上のことを思い、亡き父の回向に心を尽くしていたのですと、いろいろと弟のためにとりなし、母に怨みを述べて、弟と共に立ち去ろうとします。すると兄弟の心が通じ、母もようやく五郎の勘当を許します。二人は喜びの酒を酌み交わし、共に立って舞い、これが親子最後の対面かと名残もつきませんが、狩場に遅れてはならぬと、母に別れのあいさつをして、勇んで出立します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

舞のかざしのその隙に。舞のかざしのその隙に。兄弟目をひき。これや限りの親子の契りと。思えば涙も尽きせぬ名残。牡鹿の狩場に遅参やあらんと。暇申して帰る山の。富士野の御狩の折を得て。年来の敵。本望を遂げんと。互に思う瞋恚の焰。胸の煙を富士おろしに。晴らして月を清見が関に。終にはその名をとめなば兄弟。親孝行の。ためしにならん。嬉しきよ。

## 能のミニ知識

### ★能の分類

**五番立て**…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

#### ○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

#### ○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

#### ○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

#### ○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

#### ○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

### ★能の楽器

**囃子方[はやしかた]**…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

**笛(能管)**:竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

**小鼓**:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

**大鼓**:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

## ★略式の演能

### 素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

### 独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

### 連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

### 仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

### 舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

### 袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

### 半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

### 独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

### 一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

### 一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

### 素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

### 番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

## ★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。  
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>